

芦田川（広島県）のセイタカヨシに思う事

橋本卓三

福山市の芦田川下流一帯の砂州にはオギやアシと共にセイタカヨシが広く自生している。とりわけ神島橋の上流数kmに渡っては見事な群落を作っており、冬も緑色の草体は丈3m以上に及んでなかなかの壮観である。これについては水草研究会第9回全国集会で、広島大学の関太郎先生が調査結果を詳しく発表された。砂州は最下流部では全て取り除かれて無く、水呑大橋から上流が手つかずのまま残っている。これは直接には河底に平安末期から江戸初期に渡っての港町遺跡「草戸千軒町」が埋まっているためである。しかし、その発掘調査も昨年をもって終了させられ、本年1990年からは砂州の除去作業が逐次実行に移される運びとなっている。

芦田川は現在、汽水域と言うものを持たず、海との自然な連絡は断たれている。製鉄を中心とした手近な工業用水確保のため、'81年に河口せきが完成したのである。しかし、長期に渡る生産低落で予定の効果をどれ程あげたのか極めてあやしい様である。河口湖の水は冬でも褐色で、夏には度々アオコの発生する中をウインドサーフィンをする人がそれでも結構多い。実はこの河、流域の雨量が少ない事にもよるが、中国地方第一の汚濁一級河川である。それにゴミの多い事。実に汚いのである。こうした中で最近話題になっているのが、流域下水道の建設と河口沖の海域に造成される県営の産業廃棄物処分地、それに河の上流部に以前から計画されている貯水量5,700万 m^3 の多目的ダムである。

ここ数年来、ダム工事の進行が急速化し、本年春からは本体の構築が始まる。地域振興の目玉としてマスコミの賛美はすさまじい程にバラ色である。この長さ5km程の区間は白い巨岩の重なる河道に岩壁がせまり、キシツツジの花期にはカジカガエルの鳴声もさかんになって流域内では唯一渓谷と呼び得る場所であったが、遠からず水底に消滅する事になってしまった。

近年、水辺環境の整備と言う事が建設サイド主導の下でしきりに取り上げられ、「ウォーターフロント、アクアルネッサンス」等々、得体の知れない言葉も聞かれる様である。私には良く理解できないのだが、芦田川の場合、

河口湖に計画されている水上スポーツセンターや親水公園、あるいは流域各地のレジャーランド開発と言ったものがどうやらこれに当るのであるらしい。独断をあえて言うならば、防災という面がほぼ完成されている今日、要するに「水資源の確保と経済的有効利用」と言う命題の裏返しでもあろうか。一部の人間に取っては模範的河川とは全水系が管理されつくし、水理学的にも生態学的にも完全に解析制御でき得る流路（ちょうど下水道の様に）であろう。終局は雨水排除と貯水のための巨大な都市付属施設と言うものに収束して行くのであろう。しかし、その様な野性を失い、しめ殺されかけた河川がはたして本当の河なのであろうか？ 河が各々独自の顔を持って完成するまでにどれだけの時間が費されたのか。しかも、その過程は一度きりのものである。本質的に通常理解されている所の水辺環境の創造などと言った技術で代用できるものではないと私は思っている。

芦田川下流の砂州は現在では残り少ないこの河本来の野性である。単にセイタカヨシと言う種や生息野鳥の保護にとどまらず、砂州そのものが長期に渡って慎重に管理されるべき性質のものであろう。しかし、現実には海砂を取り尽した今、砂州は貴重な建設資材なのである。思うに、ダム構築に向けて充分なそろばん勘定が成り立ったと言う所であろうか。相当な改変は避け得ないであろう。大半が消失するのかも知れない。しかるべき立場の管理責任者にとっては、セイタカヨシの事などたわ言に過ぎず、経済性を通り越した水辺環境の本質など有ってはならない事なのであろう。何にしても彼らなりの理想でやりたい様にやるのである。